

命の尊さと平和への願いを込めて

第14回日野町民ミュージカル

今年で第14回を迎えた日野町民ミュージカル「1945年8月6日のできごと」は、たまり神社でぼくらがであった仲間たち」が、10月25日、町文化センターで昼と夜の2回上演されました。当日は、子どもから大人まで総勢20人が出演し、約半年間の練習の成果を披露しました。

今回のミュージカルは、太平洋戦争の終結から70年をテーマに、命の尊さと平和への願いを歌い上げたオリジナルストーリー。

物語は、1945年8月6日、原爆が投下された日に亡くなった子どもたちが妖怪となり、現代の明地峠にあるたまり神社にたどり着きます。そこは、あまのじゃくや座敷わらしなど、何百年も前の妖怪たちが楽しく暮らしています。

妖怪になった子どもたちは、なぜたまり神社に引き寄せられたのでしょうか。どうして妖

怪になったのかも思い出せないまま、辛い記憶や悲しい記憶が思い起こされ、子どもたちは苦悩します。

そんな中、予知能力のある妖怪・件が、子どもたちが死ななければ明るい未来が待っている」と予見し、念力をもつ刑部姫たちと力を合わせ、1945年のあの日にタイムスリップ。子どもたちに未来をたくすため立ち上がります。

はなこは兄の太郎とのつらい別れを経験しながら、ほかの子どもたちと8月6日の朝を迎えます。果たして、妖怪たちは子どもたちを原爆投下から守り、奇跡を起こせたのでしょうか。

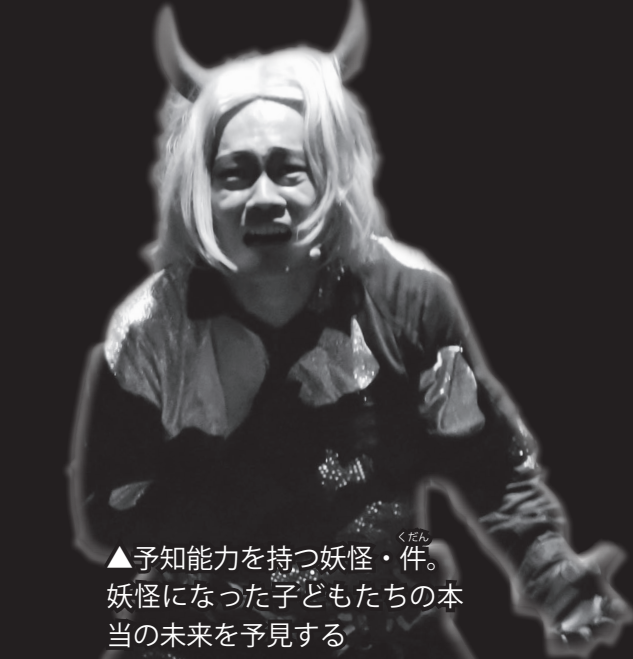
戦後70年がたち、戦争の悲惨さや記憶が薄れつつある今、戦争を経験したことのない出演者たちが、命の尊さや平和への願いを込め歌い上げました。昼と夜の公演とも会場は満員となり、出演者の熱演に客席からは大きな拍手が送られていました。



▲辛い経験をして妖怪になった刑部姫。念力を使い子どもたちのために立ち上がる



▲子どもたちの運命を変えるために力を合わせる妖怪たち



▲予知能力を持つ妖怪・件。妖怪になった子どもたちの本当の未来を予見する



▶会場を笑い声で包んだ大人たちの演技



▲私たちは座敷わらし。みんなに幸せを呼び込むの



▼妖怪になってもはなこの命は守る！



▲明日に向かって力強く生きるべし。戦争で死ななければ明るい未来があった

▼戦争のない平和な世界を、子どもたちの明るい未来を祈って



▲死んでも妹・はなこを見守ろうと誓う兄・太郎

▲戦時を元気にたくましく生きる子どもたち

▲はなこは兄を失った悲しみと戦争の悲惨さを歌い上げる